

☆と言われても、扱い方さえわからない。
さてどうしたものかな、と☆の入った小瓶を手に取り眺める。何に使うものだろう。彼女は知っているのかな。彼女はどこへ行ったんだろう。僕の隣に戻ってくるのかな。

そんなことをぐるぐるぐるぐる。結局、洗面台の彼女の化粧水の横に置いておいた。

「ただいま」

およそ一ヶ月後に帰ってきた彼女はレジ袋を提げていて、キッチンで何かを始める。

「もうすぐできるから先にお風呂入っておいて」

言われるままに風呂に浸かり、出てくると見事な魚料理が並んでいる。

「君が？」

「三日月魚の捕獲から頑張ったのよ」

預けたものは？ と問われ小瓶の☆を持ってくる。

彼女はシャンパングラスにワインを注ぎ、小瓶から☆を一つずつグラスに入れた。

「お誕生日おめでとう」

すっかり忘れていた。そうだ、僕の誕生日だ。

カンバイと口を付けた☆入りワインはしゅわっとはじける。

「これは提案なんだけど」

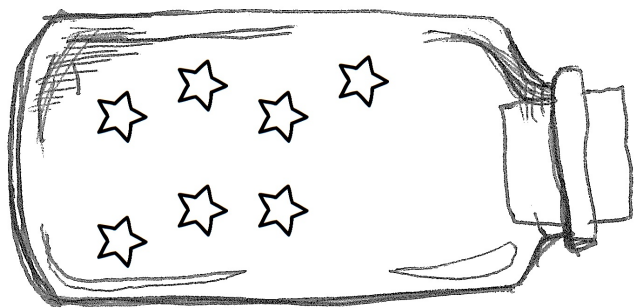
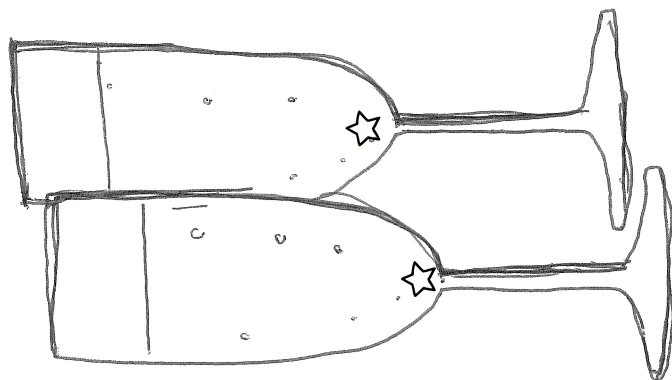
食べ進めながら彼女がいう。

「結婚しませんか」

☆の欠片はそのままが口に入るとパチパチと刺激的。

「喜んで」

僕は答えた。

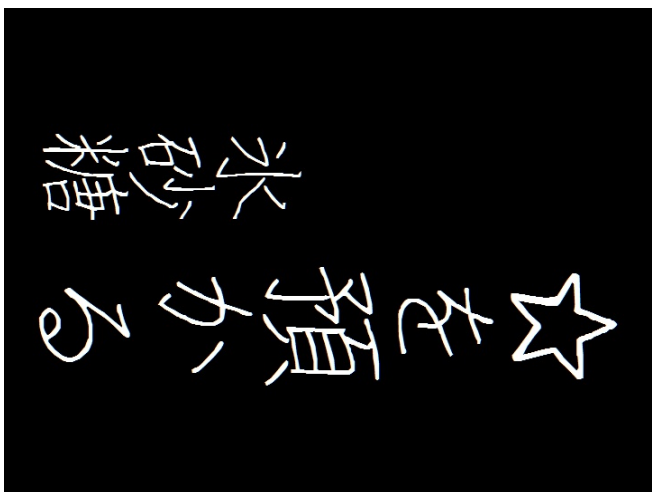


消えしまった。
大事なものだから、と、言い残し、翌日から彼女はどこか

「☆」

「これは？」

恋人から小瓶を預かる。



氷砂糖作品ブログ <http://ice03g.blog.fc2.com> / ht
tp://ice03g.blog.fc2.c



すぐく短い小説を書いています。
ぜひブログまで読みに来てくだささい。